

〔新刊書評〕

永瀬伸子他
『人文社会科学とジェンダー』
日本学術協力財団, 2022

横山真紀

日本を含めた多くの社会において、女性と男性の間には、責任や資源へのアクセス、意思決定の機会などにおいて、不平等が存在している。ジェンダーがどの程度不平等なのかを表す指標には、国連開発計画（UNDP）によるジェンダー不平等指数（Gender Inequality Index: GII）や世界経済フォーラムによる世界男女格差指数（Global Gender Gap Index: GGGI）などいくつかあるが、日本のランキングの低さからも話題になることが多いGGGI（2022）では、日本は146カ国中116位と先進国の中でも、ASEAN+3の中でも最低順位を記録している。前年の120位と比べると順位は上昇したように見えるが、総国数が10カ国減っていることもあり、改善の傾向は見られない。GGGIは、健康、教育、政治、経済の4分野について、14指標を用いてスコア化を行うが、日本は特に政治と経済の2分野でのスコアが低いことが明らかになっている。本書で着目される学術分野の女性の活躍は、政治や経済分野と同様に発展途上にある。以下に本書の章立てを示し、各章の概要を紹介する。

発刊に寄せて（梶田隆章）
はじめに（永瀬伸子）

第一部 人文社会科学系におけるジェンダー研究の過去と未来

言語学とジェンダー（森山由紀子）
文学とジェンダー（大串尚代）
宗教学とジェンダー（川橋範子）
ギリシア哲学とジェンダー平等思想（和泉ちえ）
美術史学とジェンダー（天野知香）

心理学とジェンダー（青野篤子）
法学とジェンダー（池田弘乃）
政治学とジェンダー（武田宏子）
経済学とジェンダー（永瀬伸子）
社会学とジェンダー（江原由美子）

第二部 人文社会科学におけるジェンダー問題

人文・社会科学領域における男女共同参画（佐藤岩夫）
人文社会科学におけるジェンダー問題：学問分野の視点から（仲真紀子）
ギース（GEAHSS）の設立と人文学・社会科学（井野瀬久美恵）
研究・教育の場におけるジェンダー平等への想い（室伏きみ子）
男性性というジェンダー（伊藤公雄）

第三部 現状と未来

1. 調査に見る研究者の男女共同参画の現状
『人文社会科学系研究者の男女共同参画実態調査（第1回）』について（永瀬伸子）
大学教員職の男女差：雇用形態と問題意識（上田貴子）
研究者たちの結婚・子育て状況とジェンダー構造（中西祐子）
若手のキャリア不安と家族形成（永瀬伸子）
男女共同参画についての研究者の認識（滑田明暢）
女性研究者の活躍に向けて：ダイバーシティとインクルージョンの視点からの展望（二神枝保）
自由記述回答に綴られた研究者たちの声（杉

田真衣, 滑田明暢)

2. 未来に向けて

難航する日本の保守的なジェンダー秩序の
変化 (カレン・シャイア)

ジェンダーの地平と多様性 (久保 (川合) 南
海子)

ジェンダー研究はどこまで来たか? (上野
千鶴子)

(副題は省略)

章立てから、本書がいかに多岐にわたるジェンダーをめぐるテーマを取り扱っているかをわかっていただけるだろう。

本書は三部によって構成されている。第一部は、「人文社会科学系におけるジェンダー研究の過去と未来」と題して、日本学術会議第一部総合ジェンダー分科会の呼びかけにより2017年に設立された人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会 (Gender Equality Association for Humanities and Social Sciences (GEAHSS 略称ギース)) に参加する、多様な学問分野におけるジェンダー研究の動向について概観している。

第二部「人文社会科学におけるジェンダー問題」では、人文社会科学系全体のジェンダー平等について、公表されているデータや政策的な動きの解説、分析を行っている。学協会を超えた連携である GEAHSS の設立についてもここで説明されている。

第三部は、「現状と未来」と題し、GEAHSS が2018年に行った『人文社会科学系研究者の男女共同参画実態調査 (第1回)』の結果からわかる、人文社会科学系研究者を取り巻く現状を様々な切り口から解説している。最後により広い視点から、人文社会科学系の今後の展望について言及がある。

本書の特徴は、人文社会科学の様々な学問分野におけるジェンダー研究の動向、ジェンダー平等に対する認識や現状を、本書一冊で広く把握できることが第一に挙げられるだろう。そして、そうそうたる執筆陣による共著であり、読み物としても興味深い。本書冒頭で言及されている

ように (p5)、執筆陣は、「ジェンダー研究に深くかかわっている研究者、少しなりともかかわっている研究者」が自身の学問分野について「ジェンダー視点を取り入れて、自由に、また初学者にわかりやすいように、今の研究動向を」書いており、それぞれの研究者の視点、切り取り方が大変興味深いのである。

人文社会科学系と一口に言っても、そこには様々な学問分野が含まれ、男女共同参画の程度や状況も異なる。ここではまず、本書の第二部にあたる、人文社会科学系全体の男女共同参画の現状について概観しよう。仲 (p138) によると、研究者全体の中で、いわゆる文系である人文社会学、その他 (心理学・家政など) を合わせた研究者の割合は約3割に過ぎず、残りは自然科学系 (大きく分けて理系) の研究者である。2020年の科学研究費補助金の配分で言えば、全体の1割半に過ぎない。さらにその中の女性に着目すると、理系に比べて文系の女性研究者割合は高いと言われていても、そもそも母数が小さいために、実数で言うとな文系の女性研究者は理系の女性研究者よりも少ないのである。人文社会科学系の女性研究者に焦点を当てた本書は、仲が言うところの「マイノリティの中のマイノリティ」(p140) であることが分かる。マイノリティだからこそ、スケールメリットを獲得するために、学問分野を超えた連携である GEAHSS が必要とされた。

GEAHSS 設立に関わった井野瀬によると (p162)、設立4か月後の2017年9月時点ではわずか4団体であった加盟団体が、2018年3月には46団体に、同年9月に58団体、2021年10月時点では69団体を超える急成長を見せていることから、各学協会が男女共同参画への取り組みについて同様の問題意識を抱えており、同問題に非常に関心が高いことがうかがえる。

それぞれの学問分野におけるジェンダー研究への取り組みは、第一部に取り上げられている。言語学、文学、宗教学、哲学、美術史学、心理学、法学、政治学、経済学、社会学 (登場順)、それぞれの分野における研究動向について、そ

の道の第一人者が概観している。これほど多岐に渡る学問分野におけるジェンダー研究の動向についての記述が一堂に会することは珍しく、ジェンダーをめぐるテーマの広がりや視点の多様さは、一研究者として大変参考になった。

各分野を一つ一つ取り上げたいが、紙幅の関係もあるため、人文社会科学系の学問分野が主にどういったジェンダー問題に直面しているかについて、まとめてみよう。学問の担い手の性別が男性に偏ることは、研究にどのような問題をもたらすか。江原による記述を参照すると(p122)、①認識主体の男性中心性、②認識対象の男性中心性、③概念枠組みの男性中心性、④方法論の男性中心性、これらの男性中心性が、女性の経験を不可視化してきたとしている。社会学における分類ではあるが、これは他の学問分野においても当てはまる分類であると考えられる。とは言えこれらの男性中心性は、先達の研究者の功績によって、多くの学問分野で既に克服、または克服されつつある。ジェンダー〇〇学、フェミニスト〇〇学、といった形で新しい学問分野を形成する、あるいは学問分野内に上手く内化されるなど、ジェンダーの視点はそれぞれの分野の「議論の質や方法論などを確実に進化／深化、そして多様化させ」(p155)ることに貢献した。

しかし井野瀬が指摘するように(p155)、「学術的なジェンダー研究の進展」と、「所属学会の内外で研究者自身を取り巻く環境の改善」とは別の問題であった。現在多くの学協会が、女性の会員数がなかなか増えないこと、徐々に増えていたとしても、要職に就く女性の数が増えないという共通の悩みを抱えているようである。前者は入り口の問題であり、人文社会科学系研究者を志す動機づけを大学院生、学部生、ひいては中学生に与えられることができていないことが原因として挙げられるだろう。後者はいわゆる「ガラスの天井」であり、学術分野に限った話ではなく政治や経済の分野でも見られる。この点について、「政治学とジェンダー」の章で「女性研究者が学会や研究プロジェクト

の運営に関する決定作成の場に参画することが、女性研究者の活躍の拡大に資する」好例が示されている(p100)。

現状の問題把握を行い、学協会間のグッドプラクティスを共有するために設立されたGEAHSSは、2018年に研究者個人を対象にした大規模調査を行っている。本書の第三部は、この調査について詳しい結果の解説を行っている。「女性研究者」と聞いて一般の人がまず思い浮かべるのは、いわゆる「リケジョ」と言われるような理系の研究者であろう。学術分野における女性活躍を考えた場合、真っ先に挙がる問題が理系の女性研究者の少なさであり、STEM分野を志す女子中高生を増やすことは早くから政策課題としても取り上げられていた。女性の圧倒的少なさから、自然科学系分野では人文社会科学系よりも早い時期(2002年)に「男女共同参画学協会連合会」が立ち上げられ、既に複数回大規模調査が行われている。対して人文社会科学系は、自然科学系よりも女性が多いと引き合いに出されることはあっても政策的な議論の中心になることはほとんどなかったブラインドスポットだったと言っても差し支えないだろう。それゆえ、人文社会科学系の女性研究者がどのような研究上、キャリア上の課題を抱えているのかを把握できるような大規模調査はこれまでほとんどなかった。GEAHSSによる調査は、そういった意味で非常に意義が大きい。

さて、その調査で明らかになったことは、非常に厳しい結果であった。人文社会科学系の女性研究者は、非正規雇用が多く、常勤雇用は人文科学や教育学で3割程度、社会科学では2割と理系と同程度にとどまっており、常勤の中でも女性は男性よりも職位が低いことなどが明らかになった。女性が多い分野であるということが、女性に安定雇用をもたらすということと同義ではない現状が確認された。その一因として挙げられるのが、女性にかかる育児負担の重さであり、女性研究者の約3割が子どもを持つ時期と研究について二者択一の選択をせざるを得ない状況に置かれたことがあることが分かっ

た。学位の取得やその後のキャリア形成期が、家族形成を考える年齢と重なるために、女性の未婚率、有子率、子どもの人数がそれぞれに男性研究者より低いということからも、問題の根深さがうかがえる。また、ロールモデルの少なさや、育児介護等のライフイベントによって一度研究活動を中断すると復帰が難しいことなど、どれも日本社会全体が抱える問題ではあるものの、一般に女性が多いと言われている人文社会科学系分野においても同様の問題が実態調査で確認されたことは重要な知見だろう。ぜひ定期的な調査を行い、複数調査年の比較調査なども行ってほしい。

最後に、GEAHSS が描く未来について触れておきたい。二神（p265）や上野（p319）が言及するように、今後の世界は、SDGs に代表されるように、あらゆる社会や個人を取り残さないという価値観を含んで進んでいこう。性別は代表的なものであるが、「たとえ少数であっても不利益を被らずにいられる環境」を作ることが、「性別カテゴリーにとどまる課題としてではなく、子どもの有無、単身かどうか、性的指向・性自認、雇用形態、世代、地理的条件、障害、国籍等、多様性をめぐる課題」（p279）に直面した際の土台となるのである。GEAHSS による緩やかなつながりに期待したい。